

最近の石見神楽の役割

～商業化を図る神楽と伝統を重んじる神楽～

はじめに

・神楽と聞いてどのようなもの、どのような神楽を思い浮かべるだろうか。採物神楽、湯立神楽、獅子神楽、備中神楽、大草神楽などといったたくさんの神楽がある中で今回は、島根県西部地区に伝わる石見神楽について述べていく。

私の母の地元が島根県江津市にあり、幼い頃から触れてきた。そこで、石見神楽に魅力されお祭りやお宮の奉納神楽など地域で行われる神楽だけでなく、大会で行われ、様々な神楽社中(1)が集う石見神楽に6歳の時に初めて触れた。神社の奉納だけでなく、各地域の団体が集まり神楽を行う石見神楽大会の時、当時、都治神楽社中(江津市)の神楽しか知らなくて、島根県の石見神楽にも地域によって演出、口上、舞、面、演目など異なっている。派手な石見神楽、正直なところ地味な石見神楽など、様々な石見神楽があることをこの身で感じた。ここ最近では、商業化を図り、紙吹雪、ドライアイス、小道具を使用した真新しい神楽を島根県江津市の道の駅の中にある舞の座でおこなっている。また、伝統と重んじる対照的な石見神楽も存在している。

私自身、神社やお宮で見られるお祭り事で行われる石見神楽が好きで、商業的に行っている神楽はビジネスのにおいがしてあまり好きになれない。

そこで、伝統的な舞を演じる益田市の石見神楽の歴史や、江津市の石見神楽の歴史の理解を深め、真新しい舞を演じている舞の座の石見神楽の在り方などの最近の役割について考えていく。

島根県江津市ではじめてハ調子の石見神楽広めた都治神楽社中(2)の顧問を務めている林浩司(3)さんと、島根県益田市に拠点を置いている、益田市の石見神楽の中で最も古く、180年の歴史を誇る石見神楽保存会久城社中(4)の神田唯佑(5)さんに直接インタビューをして明らかにしていく。

1. そもそも石見神楽とは？

・日本最古の書物である古事記の日本神話をもとにした石見神楽は、まち中に響き渡るきれ

いな笛の音色とお宮の空気を引き締める太鼓囃子に合わせ、金糸銀糸を織り込み登り竜や唐獅子、鶴などの刺繍を施している豪華絢爛な衣裳とまるで生きているのかというほどすさまじいほどの表情の面をつけ舞う、島根県西部の石見地方に古くから伝わる伝統芸能だ。昔は、お宮で行う秋の収穫祭や地域で行う祭りなど期間を限定されて舞を演じられてきたが。現在では、島根県各地域で石見神楽の夜神楽の定期公演会を行い、島根県立海洋会館アクアスのような公園などでも定期的に舞を演じるなど春夏秋冬島根の西部地区ならどこでも神楽がみられるようになった。

石見神楽の演目だが、儀式舞と能舞と呼ばれる大きく分けて二つの舞に分けられる。神様を迎え入れ、神の心を鎮めるために行う「儀式舞」、古事記や日本書紀を題材にした「能舞」など合わせて30数演目にのぼる。継承している神楽団体は、島根県内にとどまることなく東京や大阪などにも拠点を置き、130をこえる団体が存在している。

さらに石見神楽は、火薬や煙を使用した派手な演出や勧善懲悪といった初めて見る人でもわかりやすいストーリーの演目もあり、迫力満載の伝統芸能には珍しく誰でも楽しめるのが特徴だ。

2.石見神楽の歴史

①起源と変化

- ・石見神楽の起源や変遷は、島根県益田市観光公式サイトによると、

島根県西部の石見地域で演じられる神楽のことです。

その由来は古く、平安末期から室町時代に石見一円で、農耕神的なものとして村々に祀られる集落の神「大元神」を信仰した田楽系の行事が原型と言われています。

江戸時代には出雲佐陀神楽が、歌舞伎や能の所作と融合させた神話劇の神能を演ずるようになり、その佐陀神能が爆発的に石見に波及され演劇化されていきました。

明治の法律改正により、その土地の人々が神楽を演舞するようになると、リズムは旧来型の六調子の他に、活発な石見人の気性そのままに勇壮な八調子とよばれるテンポになるなど、改革も活発化し、現在は古事記や日本書紀を原典とするものなど演目も30数種にのぼり、スケールも大きくなっています。「神事」でありながらも「演芸」的要素が濃く、ストーリーも明解。舞もお囃子も激しく、胸のすくような爽快さと勇壮さがあるのが特長です。[\(石見神楽 | 島根県益田市観光公式サイトより引用\)](#)

②主な変遷

- ・主な変遷としては、六調子神楽から八調子神楽へと変わったことだ。川本は、「石見神楽の原型ともいわれる六調子の神楽は、村々に祀られる農耕神的な祖先の神（村の守護神）である大元神のための神楽です。」(川村裕司：2012a)と言っているように六調子の神楽は、大

元神にささげるための儀式舞だったのだ。

しかし、

「石見神楽は明治前期に神職神楽から氏子神楽へと移行するとともに、神楽舞の乱れを憂いた浜田市中心部むねの海岸地域を中心に活躍された国学者の藤井宗雄や神職の牛尾弘篤などによって、詞章などの改正が行われ、ほぼ同時期、同地域において、従来の鬼囃子が、さらに急速な調子に改造されました。この改造の過程については明らかではありませんが、改正された詞章と急速で活発な調子に改造された鬼囃子を備えた浜田の神楽は、その威勢のよさや田中清見、なかすが、みななどの指導者などによって、昭和初期までに大いに伝播・普及することになります。この新たな神楽は、八調子神楽と呼ばれるようになり、八調子を受け入れなかった旧来型の神楽を六調子神楽と呼ぶようになりました。(川村裕司：2012b)」

と、言っていた。このことから、石見神楽は神職を中心に舞っていた儀式舞を中心とした大元神楽の六調子神楽から、民間人の行う氏子神楽へと移行され、従来の六調子から八調子で舞われるようになった。これらのことにより、漁師町である石見地区の石見神楽は、おっとりとした舞から急速で活発な気性の粗さを生かした舞へと変貌したのであった。石見神楽は口伝いで伝承していったため各地域によって舞、囃子、面が違う。

3.石見神楽における役割

・石見神楽の役割についてだが、石見神楽の原型とも言われる大元神楽が大元祭として神職の方々が五穀豊穰を祈願して行われていた。五穀豊穰のイメージが強いであろうが、石見神楽の演目（塵倫、大蛇、鍾馗、天神、十羅刹女、八幡、大江山、道返し。）を見れば分かるように、明らかに悪いものを神様が成敗するという物語が多い。これからわかることは、例えば、鍾馗の例で表すと、鬼を疫神と呼び病原菌を表し、鍾馗大臣を医者と表せばわかりやすいように、このように健康祈願を中心とした舞を演じているのである。

このように、五穀豊穰や健康祈願を神様に祈るため、季節ごとにお宮で神楽を奉納し、地域のお祭りとして開催され、地域のコミュニケーションを深めるなど様々な役割を果たしてきた。

五穀豊穰や健康祈願として祭りや神社の奉納として神楽を演じられてきたが、時代が進み石見神楽も変化をもたらした。

「昭和 30 年代後半になると、所得倍増政策により高度経済成長期を迎え、村からの若者層の流出や戦争と復興期に後継者の育成ができなかった側面もあり、神楽団体では、後継者不足に悩まされる状況が生まれ、活動が中断する神楽団体も出て、衰退への危機

感が高まりました。このような過渡期に、園山弘昭などの農会による「第一回神楽大会」が、昭和40年に浜田市民会館(浜田市殿町)で開催されました。農会の開催主旨は、「石見神楽の消滅か創造か」を命題とし、石見神楽を明確に観光材料と位置付けて、今後の方向性を試みる社会実験が行われました。そのため、「神楽を純然たる演劇化として舞台に立たせ」、当時、新作演目として批判のあった「大江山」を「堂々と参加させた」りしています。この活動は、その後、西日本神楽大会に引き継がれることになります。そして、昭和45年の大阪万博(日本万国博覧会)への出演は、全国的な知名度を高めるとともに、演劇化(イベント化)をさらに加速させ、この出演を契機に神楽団体の連携化がさらに図られて、浜田石見神楽社中連絡協議会も結成されるなど、その後の石見神楽の方向性に大きな画期をもたらしました。(川村裕司：2012c)」

このように、存続の危機に迫り、これまでの奉納という形で行っていた神楽を演劇という形で行い、新作演目(創作演目)である大江山を参加させ、成功を収め現在まで存続している。その結果、現在、各地域で石見神楽大会を行ったり、地域によって行っている場所があったりなかったりするが一週間に一回石見神楽を鑑賞できるようにと、入場料を徴収し夜神楽を行っている。(浜田市:三宮神社、江津市:舞の座、益田市:益田駅前ビル EAGA) 石見神楽の演劇としての役割は、現在大きく存在感を示している。その中でも、特に異彩を放っているのが島根県江津市で行っている舞の座の石見神楽だ。舞の座では、大都神楽団という発足して間もない団体が行っている。さらに、島根県益田市の高津神楽社中なども参加し、各社中の地域の特色を表す創作演目を披露するなど革新的な石見神楽を舞っている。舞の座で行う神楽は、演劇性をさらに高めた神楽(創作神楽)や、商業化を図っている神楽だ。紙吹雪や小道具の使用、ドライアイスを大量に使用する演出や衣装が派手になっている。演劇としての役割を果たすための場であることに違いはないが、健康祈願や五穀豊穰を目的としている神楽からかなり遠ざかっている。古事記を元に行っている能舞や神の心を鎮めるために行う儀式舞のどちらにも当てはまらない演目を行っていないと考えているため、この活動自体、石見神楽としての演劇という役割からもずれているのではないかと考えた。

郷土史民俗学研究家の渡邊友千代さんは、「そもそも、古事記や神話なども創作物だ([石見神楽の日] 制定記念シンポジウム『益田の石見神楽の歴史と変遷』)」と言う。さらに、「面白くないと伝統もやがて滅びる([石見神楽の日] 制定記念シンポジウム『益田の石見神楽の歴史と変遷』)」とも言っている。創作神楽は、悪いことではなく、むしろ伝統を守るためにはいいことだと言っているが、五穀豊穰や健康祈願など神楽の趣旨から遠ざかるような演目も出てきているため渡邊先生も顔を顰めながら、伝統を守るためにはしょうがないことだろうと言っていた。

そこで、島根県江津市ではじめて八調子の石見神楽を広めた都治神楽社中の顧問を務めている林浩司さんと、益田市の石見神楽の中で最も古く、180年の歴史を誇る石見神楽保存会久城社中の神田唯佑さんにインタビューをし、石見神楽の中心的存在である益田市と江津市の

石見神楽でどのような役割を持って活動しているかを聞いて舞の座で行っている神楽の役割についてさらに考えて行きたい。

4.益田市の石見神楽 ～神田唯佑さん～

①益田市の石見神楽の歴史

・益田市の石見神楽は、浜田市や江津市は、浜田ハ調子の石見神楽をしているが、石西八調子の石見神楽を舞っている。

大きなお面を使用し、木彫りの面を使用するなど古典的な石見神楽を舞っていることがわかる。なぜ、このような古典的な石見神楽を重んじているのかというのが、我々益田市の人間も文献が残っておらず困っている。学術的な先生や各神社さんたちにあたって未だ研究を続けている。

なぜ文献が見つからないのかと言うと、昭和58年の益田川の氾濫による水害、万寿年間での津波で、益田市は、海辺地域で、流出してしまったことにより資料がなくなってしまった。しかし、口を通じて伝えられたことだが、大きい面を使用している理由は、神という人間とは別物という認識をハッキリさせるためだと言われている。面を大きくすることで威厳が保たれ、この世のものでは無いと一目にしてわかるように面が大きくなっていった。

②益田市の久城社中の石見神楽の役割

・古典的な石見神楽を舞っているが、古典的な舞をしようというなどの思い入れはなく、浜田市や江津市と比べ新しいものを取り入れようとする文化が疎かったため、このような形で舞をしている。とはいえ、これまで通り古典的な古き良き舞を続けるつもりはなく新しいものも取り入れていくのが益田市の石見神楽だ。ここ最近の取り組みとしては、人形浄瑠璃と石見神楽をコラボした魂神楽(みたまかぐら)を開催した。その心としては、石見神楽は、多種多様な伝統芸能とコラボできてしまうものだと考えている。そこで、石見神楽の可能性を広げ、石見神楽の認知度を高めていくためだ。歌舞伎や能のように、誰でも知っている伝統芸能ではないため、同じ伝統芸能とコラボすることで違う層に石見神楽というものを認知させ、いいなと思ってもらい、最終的には、本場島根県に来ていただいて石見神楽を見てもらおうというのが本質にある。これは、浜田市や江津市も取り組んでないもので、益田市にしかない取り組みでこれは益田市の新たな役割ではないかと考えた。

③益田市から見た舞の座

・定期的な形で神楽を行っており、週一回必ず石見神楽がみられる劇場であり、大都神楽団自他、新しい団体であり革新的な舞を披露していく意味で賛否両論ありながら、若い人々で頑張っているため私たちは応援している。

5.江津市の石見神楽 ～林浩司さん～

①江津市の石見神楽の歴史

・江津市の石見神楽は農業信仰によるもので、したがって秋になると秋祭りで神楽が奉納されているのだと考えている。秋祭りでは、春からの農耕を助け、稲田を守ってくれた神に感謝し、新穀でつくった神饌、神酒でもてなすことになっている。そのため、十月から十一月は神々に万策の感謝を込めて市内一円で祭りが続く。

②江津市の都治神楽社中の石見神楽の役割

・そもそも石見神楽は島根県西部の郷土芸能だ。持続的に地域が衰退しないように、地域として活動して、地域力を繋いで行こうというのが目的であり役割だ。だから、石見神楽をオールジャパンのように啓発活動をしようなどというかんがえはなく、基本的には、石見地方ならではの郷土芸能のひとつとしてまちづくりになればと、田舎の力になればいいというのが都治神楽社中の石見神楽の活動の本質である。日本遺産に令和元年5月20日に認定されたからといって、全国展開するようなものでもないというのが都治神楽社中の考えだ。島根県の観光協会は、1つの観光媒体として石見神楽を活用しようという考えがあるが、そんなものではない。元々は、島根県には、隠岐島にある隠神楽、出雲神楽、石見神楽と3種類のエリアがあり、それぞれの地域文化の伝承がある。ただその中で、石見神楽は、なんでもありの社会であり、全国展開や海外進出することがある。われわれ都治神楽社中は、令和元年に国の総務省から海外交流の絡みで、ロシアのウラジオストクで公演会をした。ようするに、日本の文化としての文化交流を図るために行われた。だから、海外へ、または日本全国へ石見神楽ここにありという活動をしたいがために活動している訳ではなく、たまたまそういう機会が多くなっただけであり都治神楽社中がしたいのは地元のお祭りで神様に奉納する、そして地域のみんな老若男女お祭りで気分を高揚させて、昔ながらの祭りはいいものだと思ってもらえるそんなふるさと自慢になりたくて活動を行っている。

石見神楽を伝えていくには、生きる力、守る力、育む力が薄くなってしまってもともと無くなってしまったため、地域に根づいた活動を中心として都治神楽社中は活動している。

もともと石見神楽は、秋の奉納祭でしか舞われることはなかったが昭和40年代から神楽をしたら客が集まるため市場などで神楽をはじめて客寄せパンダとしての石見神楽が始まった。もうひとつは、神楽社中を活動していくにしても、最低限の資金が必要であり、やぶさかそのような客寄せパンダとしても活動して行かないと存続の危機に陥ってしまうため仕方ないのが実態である。これは各社中の経営手腕である。

③同じ江津市から見た舞の座

・浅利観光が経営している舞の市の中に存在していて、ようするに集客施設として舞の座が

あって、舞の市の商業活動の一環として集客を高めるために行われているのであろうと考えている。さらに、石見神楽の継承、繁栄のためにしているが、奉納神楽としてではなく、演芸活動として見受けられいろいろな小道具や派手すぎる照明を使用しているため地方の伝統芸能には見えない。長浜神楽社中や長澤神楽社中や私たち都治神楽社中などの老舗の神楽団体は一度も参加をしておらず関わっていない。さらに林さん自身も、色々な人からあはれは石見神楽ではないなどの声も多数聞くようで肯定的な意見は少ない。あまり、好感を持つことはできない。

よって、舞の座の神楽は、石見神楽としては不適切だと考えた。

6.おわりに

・昔ながらの六調子(大元神楽)からハ調子へと変化していった。今でこそ華やかな舞だが、昔はそうではなく、存続の危機に直面し、生き残っていくために神楽大会が始まった。大会となると競い、総合芸術であるが同時にスポーツのようになっていった。スポーツのようにさまざまな神楽社中が競い合うことで、石見神楽としての完成度が高まっていった派手な演出、衣装、面へと変化し、ショーとしての役割が確立していった。ショー化した事により、1970 年の大阪万博での上演などそのショーとしての魅力が認められていった。これらのことからわかるように、石見神楽を生存させていくために派手になっていき、ショー化していったのだ。昔は、大江山の演目や、神楽大会など考えられなかったことも今となれば当たり前となり違和感がない。このように、舞の座のような石見神楽は、これからは、新たなひとつの役割として受け入れられるのではないかと考えた。神様に奉納していくのが本文だが、昔のままをずっと舞っているのではなく、時代に合わせてニーズを合わせてきたため、このようになったのは偶然ではなく、必然だと考えた。だから、舞の座のような革新的な舞が生まれていったのは必然だと考えた。地域に根ざした伝統を重んじる舞、日本各地に広めるためにさまざまな伝統芸能と関わり、各地に広げる舞、今までにない革新的な舞、これらの役割があることで今もこれからも石見神楽が存続している。今ある全ての役割があるからこそ、こうやって存続しているわけで、革新的な舞、伝統を重んじる舞、各地に広げていく舞、全てを大切にしていけるこれからの石見神楽の時代を創り上げてほしい。

参考文献

- ・石見神楽 | 島根県益田市観光公式サイト:<https://masudashi.com/iwami-kagura/> : (閲覧 2024-12-17)
- ・[石見神楽の日] 制定記念シンポジウム『益田の石見神楽の歴史と変遷』<https://youtu.be/-WZCXmcLLqU?si=fEFkQSse37BuI3VH> : (閲覧 2024-12-1)
- ・川村裕司 : (2012a) : ガイドブック 浜田の石見神楽 : 浜田商工会議所 : p15
- ・川村裕司 : (2012b) : ガイドブック 浜田の石見神楽 : 浜田商工会議所 : p15
- ・川村裕司 : (2012c) : ガイドブック 浜田の石見神楽 : 浜田商工会議所 : p15

-----i

〔注〕

(1) ・ 神楽社中

島根県の神楽団体を指す

(2) ・ 都治神楽社中

昭和 44 年結成。林史浩を代表とし、石見西部を中心とした八調子神楽で神社の例大祭はもとより県内外の諸行事へ積極的に参加し花を添えている。

社中の基本理念として、石見人の性格になじみ敬神と祭事を盛り上げるため、お客様の胸に残り、再び観たいと思っていただく「残胸再観（ざんきょうさいかん）」を旨として社中全員が一丸となって古典的な神楽あるいは新曲神楽の習得に精進、研鑽を重ねている。

浜田八調子の石見神楽であり、保持している演目は、鈴神楽、塩被、八幡、弁慶、天神、塵輪、大江山、恵比須、頼政、日本武尊、八十神、道返し、黒塚、かつ鼓、切目、岩戸、神祇太鼓、鐘道、五穀種元、天蓋、鹿島、八衢、大蛇、五神と、神様に祈りを捧げる舞である儀式舞、豪華な衣装や面をつけた神や鬼が神話に沿ったストーリーを舞う能舞など様々な舞を保持している。

(3) ・ 林浩司

都治神楽社中の前代表をつとめる。現在は顧問として活動をしている。さらに、島根県江津市の石見神楽団体をまとめる江津市石見神楽連絡協議会の会長を務めている。

(4) ・ 石見神楽保存会久城社中

結成してから 180 年を誇り、島根県最古の石見神楽社中であり、伝統と歴史を持つ由緒ある神楽社中だ。昭和 30 年代に、当時まだ石見では珍しかった大江山を創作するなど神楽界に大きな影響をもたらした。昭和 30 年当時を彷彿とさせる、舞、面、雰囲気など当時からほとんど変えることなく現在まで受け継がれている。

石西八調子の石見神楽であり、保持している演目は、鈴神楽、塩払い、双剣の舞、八幡、天

神鬼、塵輪、大江山、恵比寿、頼政、東大和、八十神、道返し、黒塚、かつ鼓、切目、岩戸、十羅、禅道鬼、神祇太鼓、鍾馗、天蓋、鹿島、大蛇、石見野、五神と、神様に祈りを捧げる舞である儀式舞、豪華な衣装や面をつけた神や鬼が神話に沿ったストーリーを舞う能舞など様々な舞を保持している。

(5) ・神田唯佑

石見神楽保存会久城社中の代表をつとめる。さらに、益田市石見神楽神話会の副会長もつとめている。